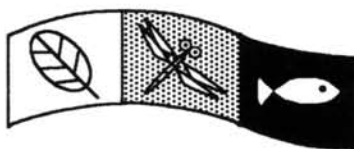


# Rio



リオ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 20・21



(平成12年1月18日 洲崎燈子撮影)

猿投川沿いの竹林からの木漏れ日

## 石を使うより頭を使おう



— 近自然技術者の「語録」から⑦ —



新見 幾男

近自然河川工法があちこちで採用されるようになって、自然石の不足が目立ってきたように思われる。土木業界も困っているようで、業界の人々が「石は有限の資源だから今に使いつくされてしまう」「小川の工事には木材や竹材を使った方がいいのでは…」という。

ごく最近に、こんな「事件」があった。東加茂郡旭町大字島崎の矢作川は、巨石のある風景で有名である。そこに大型ダンプが入り、巨石の搬出を始めた。地元の人々にとっては、永年見られた川の風景の乱暴な破壊だった。

地元の人がダンプの運転手に聞いてみると、そ

の石は矢作川支流の巴川へ運ばれているらしいのだ。そのうちに、足助町役場の周囲の巴川の護岸工事に使われていることがわかった。

旭町の矢作川も足助町の巴川も、共に愛知県豊田土木事務所管理の河川だから、県側は石の移動を簡単に認めたようなのだが、矢作川側の地元からすれば「巴川の工事のために矢作川の風景を犠牲にするな」「巴川にも石はあるのではないか」ということになる。矢作川から抗議もあって、石の移動はほどなく止まったが、足助町役場付近の工事は終了まぎわだったようだ。

もう少し前のことである。巴川のさらに支流の小河川で、豊田市の近自然改修工事が行われていた。市の技術者の案内で、ドイツの近自然技術者が現場を見に来た。ドイツ人技術者は「日本人は石を使うより、頭を使わなければ…」という表現で、その近自然改修の工事現場を批評したという。

その工事現場を私は何回も見ているが、当日のことは知らない。あとで「ひどいことを言われた」と市の技術者から聞いたのだが、小さな川に石を多用したために、村の小川の表情が固くなり過ぎてしまったのだろうと思う。

私の生まれた在所の小川は、土地区画整理事業ですべて地下の排水路にされてしまい、地上には小川は一本も残っていない。だから、ドイツ人技師にケチをつけられたという豊田市東部の松平地区の小川とは現状比較は出来ないのだが、在所の梅坪地区の地上に小川が残っていたとして、その小川が近自然河川工法の名の下に石でガチガチに固められたとしたならば、遠来のドイツ人以上に、私は腹を立てたかもしれない。きっとそうだと思う、ドイツ人の批評を今でも小気味よく思っている。村の小川の風景には石の護岸よりは、木材で固めた柔らかな水辺の方がよく似合うのだと思う。

1991年にスイスの近自然河川工法を視察した時のことである。チューリッヒ湖畔の市街地で、キュスナハト川という小規模河川を見た。湖畔の山から一気に滝のように駆け下って来て、市街地を抜け湖に注いでいる川だ。日本ならば、視界をふさぐ巨大な砂防ダムが立っていきそうな風景の、砂防河川だった。

そのキュスナハト川には、砂防ダムの代わりに、高さ50センチほどの段差工が、10メートルおきほ

どに山の上まで延々続いていた。山から木を伐り出し、それを川に横たえて、杭で固定してあるだけの段差工だった。100年ぶりとかの大渇水の年で、川は水涸れだったから、その構造が良くわかった。木製の各段差工の下のくぼみには、マスの群れが出水を待っていた。産卵のために、山にのぼるチャンスを待っている様子だった。

視察団の誰かが「木の段差工が腐ったらどうするのだろうか…」と言った。団長の福留脩文氏（西日本科学技術研究所長）が「木は腐るからいいんですよ。山の間伐材がまた使えます」と。

それでも私は「あれは本当の木材ではなく、コンクリート製の擬木では…」と疑った。そばに居た視察団事務局の伊藤昌明君（今は市河川課係長）がキュスナハト川へ跳び降り、段差工の何力所かに爪を立てていて、それから「やあ、これは本物の木です」と言った。川へ跳び降りるのが素早かったから、きっと伊藤君も、スイス人は擬木を使っていると疑っていたに違いないだろうと想像できる。

余談であるが、伊藤君が特別にあざやかだったのは、ニュールンベルクからミュンヘンへ酒を飲みに行った際に踊るような身ぶり手ぶりでインターシティ列車の特急席を団体予約してくれた時と、このキュスナハト川の一件の時の二回だった。もう10年も前のことだが、遠い記憶ではない。



(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長)

# 矢作川の木々



## その1 ～クサギ～

中坪 孝之

葉を揉むと臭いから「くさぎ」。数多の植物があれど、これ以上単純な名前はなかなか見つかりません。クサギは林縁などに多いクマツヅラ科の低木で、北海道の南部から沖縄まで、広く分布しています。葉は三角形で大きく、長さ10cm以上にな



クサギの実（お釣土場水辺公園、越戸町）

り、長い葉柄があります。

夏の終わりごろになると、白色で多少ピンク色を帯びた花を咲かせます。一つ一つの花は径が2cmぐらいですが、たくさん集まって咲くので、遠くからでもよく目立ちます。この花には良い香りがあり、チョウやガ、中でもアゲハチョウの仲間をよく引きつけます。実は熟すと鮮やかな青色になり、その下に赤い萼がついている様子は、とても美しいものです。この実で布を染めると浅黄色に染まります。

葉には臭いがありますが、鼻が曲がるような悪臭でもありません。この臭いを嗅いで「ピーナッツバターのような匂い」と言った人がいますが、なるほどそう言われてみれば、美味しそうに思えてくるから不思議です。実際、クサギを山菜として食べている地方があります。広島県の北部や岡山県では、「くさぎな」と呼んで、若葉をそのまま食べたり、湯がいて乾燥させて保存食にしています。岡山県の吉備高原では名物になっているとか。名

前とは反対に、なかなか魅力のある植物です。

（なかつぼ たかゆき、広島大学大学院 助教授、  
豊田市矢作川研究所 共同研究員）

## その2 ～オニグルミ～

洲崎 燈子

オニグルミはクルミ科の落葉高木で、日本全国に分布します。雌雄同株で、川沿いに生えていることが多く、直径1m、高さ30m近くになることがあります。他のクルミ科の木同様、小さな葉が集まって一つの大きな葉を形作っている（羽状複葉）のが特徴です。樹皮は深く裂けており、初夏に長い穂のような花をつけます。

人とオニグルミの関わりの歴史は長く、多岐にわたります。種子は古くから好んで食用にされましたが、特に肉食の習慣が薄かった日本や中国では、蛋白質や油分の供給源として重宝されました。材は堅くて狂いが少なく、各国で家具や器具を作るために使われてきました。果皮からは黒色の染料や、川に流して魚を捕る毒をとりました。

河川敷の整備の折りに伐採されたりしたため、数多くはありませんが、豊田市内の矢作川沿いにも成長したオニグルミの木があります。この地域の発達した河畔林の指標となる植物でもあり、大切に育てていきたい樹種です。



オニグルミの葉（古岸水辺公園、扶桑町）

（すぎき とうこ、豊田市矢作川研究所 主任研究員）

# 枝下用水の開削をした西澤真蔵の 菩提寺瓦屋禅寺を尋ねて

今井 勝美

枝下用水は、明治用水と共に明治時代中期に造られた矢作川より取水する農業専用水路であります。この水路を造った人は、滋賀県愛知郡八木荘村（現在の秦荘町）野々目で生まれた西澤真蔵氏です。その西澤家の菩提寺である瓦屋禅寺を紹介いたします。

場所は同じ滋賀県の八日市市にある寺で、名前は瓦屋禅寺といます。この寺は臨済禅宗妙心寺派で、由緒によれば聖徳太子が四天王寺建立に際し、山麓の土を採って瓦を十万八千枚焼かせて、その用に供した後、ここに寺を建立して瓦屋禅寺と称したのが始まりと伝えられておりますが、この山麓で早くから瓦が焼かれていたことは事実で、旧表参道の階段登り口付近では、白鳳時代の瓦窯の跡も発見されており、おそらくは、箕作山麓で瓦製造に携わっていた百濟（現在の韓国）から渡来した人々の菩提寺が始まりであったと考えられます。

時代は移り、奈良の東大寺や比叡山の延暦寺の末寺であったこともありましたが、東大寺三綱記には寛平3年（西暦891年）に、東大寺の源仁僧郡が伽藍を再建して華嚴宗に属し、一山僧房は24字、衆徒16口を数えたとあり、永禄年間（西暦1558年）の罹災以前、室町時代末期には48坊があって建部郷の祭礼塔頭が悉く渡御に加わったと伝えます。宗旨も天台であったと云われておりますが、嘉吉4年の文書によりますと、東大寺末であったと思われております。その後、120年の間に天台末に転じた確証は今のところありません。



平成11年10月28日 野場 嘉輝氏 撮影

永禄年間、即ち戦国時代には多くの伽藍や建物が戦火に消失して終わったようであるが、江戸時代生保年間（西暦1644年頃）に、現在の八日市市に仙台伊達藩の領地がこの地にあり、伊達家の菩提寺である、奥州松島瑞巖寺の高弟香山祖桂和尚の手により中興され、臨済宗寺院となり今に至っております。

現在の本堂は、入り母屋造りの萱葺き屋根で延宝年間（西暦1672年頃）の建立であり、中には本尊の千手観世音菩薩立像（国指定重要文化財）が33年毎に開扉される秘仏として安置され、それを護持するように木造四天王立像（八日市市指定文化財）も安置されており、共に平安時代後期にできたものです。

又、本尊は芋観音と称され江戸時代には、天然痘をはじめ流行り病、難病に靈験あらたかとして諸国よりの参詣者で賑わい、薩摩芋を供えて祈願をしたと伝えられ、現在も同じ願いを託す人々が多いことには変わりはありません。

この他にも境内には数多くの文化財も残されていることと、周辺は、夏に住職が百濟の人を偲んで植えたむくげの花、時期は短いが晩秋のモミジの紅葉黄葉は一見の価値があると思います。寺は、平安時代に始まった近江西国観音霊場の第18番札

所となっており、国内各地からの巡礼者が杖をひかれていますので、関西方面へお出かけの時は、参詣を兼ねて一度立ち寄ってみるのも良いかと思ひます。

（いまい かつみ、枝下用水土地改良区 事務局長・豊田市矢作川研究所 幹事）

# お祝!! ホームページ開設

ホームページアドレス : <http://hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html>

( 2月10日以降は<http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html> )  
に変更になりますのであしからずご了承下さい。



矢作川研究所

ようこそ!

表紙  
紹介  
話題  
リンク

Address : 豊田市西町 2-19  
E-mail : yahagi@hm.aitai.ne.jp  
Telephone : 0565-34-6860  
Fax : 0565-34-6028  
→ 東辺町方面

豊田市矢作川研究所は1990(平成)年に設立された「豊田市矢作川流域整備計画推進委員会」の推進を受け、1994(平成)年7月に豊田市、矢作川流域整備協議会、林下用地下水地帯改良の合同調査による第三セクター方式で発足しました。

以降、矢作川の豊富な水量の維持、水質の保全、住民の生活にうるおいとやすらぎを考ふる良好な河川環境の維持と創造をめざして調査・研究活動を行っています。

0000 人目です

悲願となっていました当研究所のホームページが、昨年(2000年)の12月29日に立ち上がりました。

内容は研究所、研究員、プロジェクト、矢作川についての紹介やこの月報のテキストや年報の目次が参照できるようにになっています。

まだまだ見るところも読むところも少なく、未完成的な状態ですので、これから少しずつ充実させていく予定です。

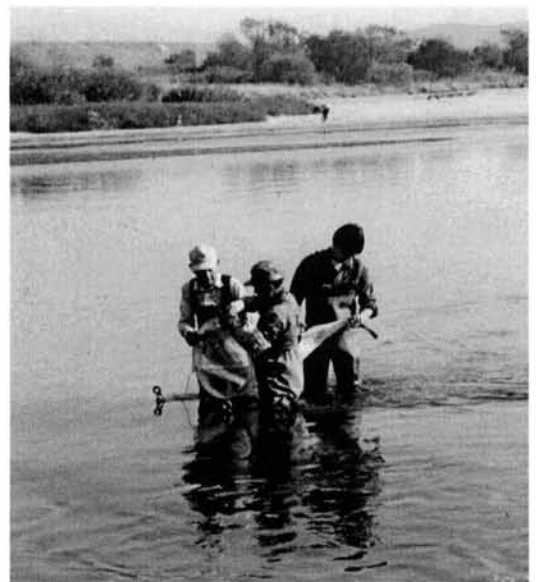
もしお時間がありましたら一度ご覧下さい。

## 矢作川天然アユ保全対策専門委員会の設置について

「矢作川に天然アユの復活を！」をスローガンに、昨年11月に天然アユの保全対策事業化へ向けて、検討・整理をする幹事会が設置され、4月には事業化方針を決定する委員会が発足します。

当研究所では西日本科学技術研究所と矢作川天然アユ調査会とともに1996年から3年間にわたり、天然アユを取り巻く現状の把握を行い、16項目の保全対策を打ち出しました。保全対策の内容は流量の確保、水質の改善などの現在の矢作川が抱える根元的な問題点の改善や禁漁期の設定・産卵場の造成などの産卵保護、魚道の改善などの短期的な取り組みで解決可能な問題などが盛り込まれています。

この委員会には建設省、愛知県土木事務所、中部電力、矢作川水辺愛護団体などの方々に参加して頂き、幅広い視野で矢作川の天然アユ保全に向けての議論が繰り広げられることを期待しています。



流下仔アユ調査の様子

# 研究所の調査風景 ~12・1月~

年が明けてからは、デスクワーク中心の作業となっています。報告書の執筆、きたる研究会の準備とこなきなければならぬ課題がだんだんと詰まってきました。今回はちよっとさかのぼって、昨年暮れの模様を報告します。



ただき、糸状緑藻類がほんのわずかですが削られていく様子を観察できました。研究所では今は宙に浮いている、実験的アプローチの今後を考えさせられるいい機会になったと思います。土木工学の分野ではちよとした機関であればどこにもある装

置だそうですが、数百万円以上という価格もあって生態学の研究室で実験水路を導入したという話はあまり聞きません。でも将来は多目的に使える実験水路もほしくなりました。

12月4日(土)―古川プロジェクトの現地説明会が開かれました。地元の扶桑町より30人近くの方にお集まりいただき、各班の研究の概要説明を行いました。地元の方からもいくつかの要望等の意見が出され、激励のことばもいただきました。特に、地域の老人クラブ代表でもある築山さんの、マイクなしでも充分な語気の熱弁は印象的でした。



12月17日(金)―地元から「逢妻女川の支流、初音川周辺をビオトープにしたい」との要望があり視察してきました。しかしながら写真を見てもお分かりのとおり、洗剤の泡が浮いている



ような川です。水質の簡易テストでも5mg/l以上のアンモニア(ほとんど全ての生物が死んでしまう濃度)が検出されました。3面張りのコンクリートをやめたところで、水中の生き物が戻ってくる見込みは残念ながらほとんどないでしょう。「生きた川」にするのに手助けできなかった。いもどかしさを感じさせられました。

## 編集後記

もう2月を目の前にしての遅いご挨拶となりますが、明けましておめでとうございます。本年も研究所の活動にご理解・ご協力を賜ります様よろしくお願い申し上げます。

最近、研究所に大きな水槽(120×45×50 cm)が入りました。まだ、試しに水が入ってあるだけで何も泳いでいませんが、いつかきっと矢作川の小さな小さな水族館となる日を目指してがんばります。(白)

\*\*\* ご意見、ご感想をお寄せください。 \*\*\*

発行：豊田市矢作川研究所 〒471-8501 愛知県豊田市西町3-60 豊田市役所 土木部河川課内

tel. 0565-34-6860 fax. 0565-34-6028